

公開シンポジウム

宗教の社会貢献はどうあるべきか——21世紀の課題—— 報告

去る2月21日、本財団の公開シンポジウム「宗教のはどうあるべきか—21世紀の課題—」が無事に終了した（会場は大正大学）。参加者は140名であり、「社会貢献」が企業や教育機関だけでなく、宗教界でも注目を集めるテーマであることが理解できよう。日本における市民の社会参加は1998年に施行された特定非営利活動促進法（NPO法）などを通じて、ここ10年でより活発となり、公益法人法をめぐる議論もあって宗教界でも社会貢献が広く論じられるようになった。またこうした動向を追い風に宗教研究者間でも、学会報告、研究会などが盛んに行われるようになっている。

かかる背景もあって今回の企画となったが、本財団の企画は、宗教界の実践者と宗教研究者が登壇するところに特徴があり、本シンポジウムの登壇者は以下の通りである。

- ・ 報告：
石上和敬（武蔵野大学／臨床仏教研究所）
賀陽濟（田無神社／精神科医）
本田哲郎（聖フランシスコ会 ふるさとの家）
宮本けいし（妙智會教団）
- ・ コメンテーター：稲場圭信（神戸大学）・弓山達也（大正大学）
- ・ 司会：島菌 進（東京大学／国際宗教研究所所長）

もちろん教団を代表しての発題ではなく、宗教者としての実践とお考えを披露していただいた。そのため宗教伝統色より個々人のパーソナリティが際立っていたようである。実践や内省を重んじる報告（賀陽氏・本田氏）もあれば、宗教伝統や組織活動を強調された報告（石上氏・宮本氏）もあった。実践なら実践、その背景となる宗教伝統・教義なら伝統・教義といった同じ地平での報告や議論を期待していた向きには戸惑いもあったかもしれないが、個別性を期待していた聴衆にと



石上和敬氏



賀陽濟氏



本田哲郎氏

一方、本田氏はこの大阪・釜ヶ崎の活動から宗教の現状肯定的側面と刷新の側面との兼ね合いを問題とし、教団の押しつけがましい社会貢献に警鐘を鳴らし、「異なる生活文化の数だけ異なる宗教文化がある」という。そして宮本氏は自身が代表をつとめる「ありがとう基金」の活動を中心に、組織活動と世間の評価との兼ね合いについて述べられた。いずれも宗教界が社会貢献に向き合う際に重要な課題といえよう。



宮本けいし氏

っては歓迎すべき内容となったであろう。

ここで4つのご報告を「兼ね合い」という観点から整理してみたい。研究者でもあり僧侶でもある石上氏は僧侶の本来的活動と社会貢献とを兼ね合いについて論じられ「仏教者にふさわしい社会貢献」を模索された。賀陽氏は国内外での活動を通じて、合理主義と宗教との兼ね合いを論じられ、「新たなる宗教のパラダイム」を示唆された。

コメンテーターやフロアからは、新自由主義や自己責任論の強まる風潮の中での宗教の社会貢献の可能性、教団の進める社会貢献を会員メンバーがどうとらえているのか、そして宗教に期待薄の我が国において宗教をどう外部にアピールするのかといった質問が寄せられた。

ちなみに筆者は別の財団で1990年代後半に仏教者の社会参加関連の諸企画を毎年行っていたが、当時はこうした企画に数十名集めるのも一苦労であった。今回のシンポジウムの盛況と活発な議論と比べると、隔世の感といえよう。